

直感への教育と教育センス

機関誌「才能」第1号（一九五三年）より

鈴木鎮一

直感への教育

優れた能力が発揮されるためには、いろいろな要素が総合されて行われるのでありましょうが、その一つとして「為す」という行為だけを考えてみても、そこにはいろいろの優劣の段階があります。

教育の立場からこれを眺めるとき、いかにできるか、という極めて簡単なことの中に、そのいかにという能力の段階が複雑に存在し、いかにの程度のあり方に従って、教育の優劣が決定されてゆくこととなると思います。

だから教育として能力を育てる場合、私どもは自分の能力限度や常識を水準としないで、一つの高い能力の生まれる条件とその方法をとりながら、他人の能力を育てることが必要だと私は考え、かつ実行しているのです。

「一つの高い能力が生まれる条件」ということは「勘の力まで育てる」ということであります。それを初歩であ

ろうと上級であろうと常に一つのものが与えられた以上、その教材を材料にして、人の能力を勘の働きに近づけてゆく方法をとるので。

そうした方法と、順次訓練してゆく勘の働きの数限りない積み重ねが、優れた能力となって発揮され、人間の高い能力となるのだと考えます。そのよい教育法、初歩から一貫して、勘の力を育てる教育法こそ、人はその母国語母語の能力を育てる方法の中に行っているのです。私どもが日本語を話す場合、思いと言葉とがほとんど直結して語られることを、一つの優れた能力の姿として認めなければならぬのではありませんか。

勘は、名人や大家となつてから初めて生まれるものではなくて、初歩から勘を育てる努力を積み重ねた教育を行つた場合に起る当然な結果にすぎないものだと考えます。

要するに「能力に徹する教育」のあるところには、常返つてみますと、私の場合にはそれは「能力に徹した教育」から縁の遠いものであつて、ようやく記憶した程度、ようやく判つた程度の教育の積み重ねでありました。だから外国語を使用する時には、その記憶をたどり、ようやく判つた程度の理解をもって判断しながら、話し、かつ読むという、情けない能力であります。

このような結果になるのは、一般の教育指導の常識が、記憶した程度、判断できた程度をもって、教育したのだというがためだと思つてあります。

教育指導の常識の変更をしなければならぬのです。私どもの才能教育運動の一つは、明らかにこの教育常識の変更を要求してあります。

才能教育においては、例えばキラキラ星が弾けるようになった場合、私どもも指導者のいわゆる教育は、それをより立派に、より自由に、直感の能力へまで育てようとするのであります。ところが子供の親たちの常識が、今までの一般の常識から一步も出ず、弾けるようになったのだから、次の曲へ進めるのが当たり前だ、という考えである場合、私どもは真に困るわけがあります。

皆さんに判つてもらいたいところは、ここにあります。判らない親たちは、弾けるようになったのに少しも先へ進めてもらえないという不満をもっておられるので、練習も熱心でなくなり、指導者の意気込みと反対に、練習



に非凡な能力が示されるもので、母国語は能力に徹した教育が行われて、みな非凡な能力を発揮しているのです。ところが、それがたとえ非凡な能力であつても、あまりにも多くの人々が発揮するようになると、それが常識となり平凡なことだと考えるようになるだけで、母国語の教育は、人間を非凡な高さに育てる方法と原理を教えているものだと思うのであります。

外国語を学んで知ること、自分の母国語の能力の高さであります。外国語を教えられ勉強したあとをふり



ものだと思います。それからまた、そうした能力への要求の高さが、育てられる者の能力の高さになってゆくわけでありますから「勘の能力へ近づけてゆく教育、直感の能力へまで訓練してゆく」高さが必要です。ここが大切なところですよ。それぞれ指導者の要求する高さの差によつて、能力差も生まれてくるわけであるからです。それほど問題ですから、このことを無視して曲ばかり先へ進むことは、能力を育てることは止めてくれということと同じことです。

私の、直感への教育の強調は、音楽の教育の場合、これが欠けている以上、全然ものにならないほど重要であるからであります。音楽の場合がそうなら他のものの場合も同様であるはずなのです。他のものは能力表現の形が違ふのであつて、音楽のように、直感的能力のみが実力として強く感じられるような表現形式のものの場合、そこに歴然とその重要さが示されるというだけのものであると思います。

直感へまで育てる……という点をあげてゆくならば音楽の場合、すべてが直感へまでの訓練が必要なのです。一、音程を正確にするためには、寸法で決めるのではなく、耳の感覚に従つて、指が極めて正確な音の位置を瞬間に押さえて誤らないようになるまで直感を育ててゆく。

への努力が減つてゆくのです。だから才能を育てようと熱心になつてゐる先生の場合、キラキラ星を一年もやつてもまだ先へ進めてくたさらない、という不満の声が強くと、先生たちを非難するようなことになるのだと思ひます。ようやく弾けるようになった、さあここだ!! と、その時こそ大いに努力していただきたいのです。もう弾くことができるのだから、努力すれば必ず上手になることも早いのです。立派に育てるための準備ができたというところへ、ようやくたどりついたのですから、このところの努力だと、大いに努力してくださいれば、ぐんぐん能力が高くなつてゆくのです。

ところが常識が違つてゐると、さあ、ここだ!! これからだ!! という大切な教育のねらい所で、親の方々は、さあ次だ!! という考え方に支配されてしまうのです。それで失敗するわけです。このような常識をもつた人々の下では、生徒たちの能力は高くへは育つてゆかないのです。立派な先生、立派な指導者といわれる人々は、この点が違い、何らかの必要な形において能力を育てている人々で、育てる方法を知りそれを行つてゐるのであります。

能力を「勘の能力へ近づけてゆく」または「直感の能力へまで訓練してゆく」教育のために必要な方法をそれぞれ案出し、行つてゆくところには、必ず人の能力は育つ一、曲(音楽)を思い出しながら弾くのではなく、思うことを母国語で話すことが瞬間にできるように、音の関連から、瞬間に次のメロディーなり音なりが要求され、即座に準備され演奏されてゆく能力へ育ててゆく。

一、弓の馬毛の弾力を知り、弦にすいついて美しい音を出す弓の使用法の感得をさせる。このような簡単なよう極めて複雑な重要な勘の世界を教育し会得させる直感の世界、このことを外形から見れば、弦の上を弓が往復するだけのことです。

しかし深く掘り下げてゆけば、初歩者から名人までの幾千幾百の優劣の段階に分けることができるものを、さつぱりに教育するかという難しさです。

などなど、数えあげてゆけば、いろいろあるのです。これらについて考えてみても、それは、外形的にはみな極めて簡単なやさしいことなのですが、直感への教育の立場からみると極めて正しい多くの訓練と、巧みな会得をさせる手段とが必要な世界なのであることが判るのです。教育の深さの問題なのです。

だから、うっかりすると多くの教育の失敗が生まれる可能性があるわけで、深く掘り下げて、直感への能力を育てる教育法を行わない以上、高い能力を育てることができないわけがあります。

このことは一般教育の場合でも同じことだと思えます。すなわち外形的な指導と、掘り下げた力への指導との問題として考えられるわけでありませぬ。例えば、算数を教えた、そして子供たちはよくできる、というだけの問題の中にも「いかにできるか」という点で千差万別の能力の違いが有りますよ。

直感という文字の用い方を私は適当なところに用いていないのかもしれませんが、言葉のように、思うと同時に話すことのできる能力も、直感へ働く能力だと私は思うので、直感という言葉を使用しているのです。一般に言う直感という意味も、また勘の意味も、この際みな含まれて「直感への能力」と言っているものとご理解ください。

つまり意識的に、記憶の中から探し出す時間を必要としたり、考え込んでみたり、データを調べたりするため、時間を要することの必要なく、瞬間に、それらのものの行為なり、言葉なり音なりに正しく表現できる能力も直感であると、ここでは言っているのです。

事実、人間の能力として役立つものは、みなこの直感の領分に属する能力です。

走って行って町の四つ角で左へ曲ってゆくことでも、平素の訓練によつて、適当な場所から曲る準備をし、適当なところで左へ曲ってゆくわけで、距離を測定したり、

曲るカーブを考えてから曲ってゆくのでは、問題になりませぬ。自動車で曲る場合には、それにもう一つ機械を操作する直感が加わり、スピードと距離との関係が直感で育て作られていることによつて、走りながら曲ってゆくことができるのです。

文字を習得する場合でも、書いていてすらすらその文字が流れ出す如くに出るところまで直感への教育ができているとき、習得した文字が人の能力として役に立つわけでしょう。考えてみれば、文字をどうやら知っている程度に育てた教育と、すらすらと流れ出す如くに適正な文字が流れ出て書いてゆるところまで育てた教育とは、大きな能力差があるわけでありませぬ。

このようなことを私が記したとて、別に新しいことでもなく、人々は、あまりにも当たり前のことを私が言っている、とお笑いになるかもしれませんが、一般教育の実際には、この直感への教育がまるで行われていないのです。ことに、初歩からのすべての段階に、一つひとつ直感への能力を育ててゆく教育、すなわち才能教育法は、一般ではあまり実施されてはいないのです。

だから極めて平凡な、当然なことではありますが、直感への教育の重要性について、私の考えを述べたわけがあります。